

田舎の診療所で思うこと

深川医師会 理事
北竜町立診療所 所長
浦本 幸彦

僕の住んでいる北竜町は人口約2,000人で自然豊かな農業の町です。地理的かつ行政区分的な理由から深川市、妹背牛町、秩父別町、沼田町と共に北空知医療圏を形成しています。深川市には基幹病院である深川市立病院と十数軒の医療機関があり、その他の町にはひとつずつの医療機関があります。

仕事の上で気になることと言えば、紹介の事と休日診療の事でしょうか。診療所には入院施設はありませんが町内には特老（80名入所）があります。一般外来と特老嘱託医の二枚看板です。1次医療機関としてのんびりとはしていますが、油断しそうな日常診療の中に時折ホンモノが隠れています。高齢者が多いので当然といえば当然です。また急変も多く勤務時間内でも外でも2次、3次医療機関への紹介があります。

紹介の際に一番気を使うことは、時間外の受け入れ病院への依頼です。時間外診療で救急症例に出合いますと緊急性の有無やなるべく正確な診断を即座に判断し搬送の準備をしなければなりません。いわゆる「みたて」です。1次医療機関の医者の実力テストです。更に高次医療機関が人手不足と過剰労働で疲弊していることは承知しています。電話口で疲れて辛そうなドクターに仕事を押し付けるわけですし、貴重な医療資源である高次医療機関を無駄遣いすることはできませんから、尚一層慎重に成らざるを得ません。患者さんのことを考えつつ搬送先の病院にも気を使いつつ「よいみたて」をしなければいけません。学生時代はテストが嫌いで（もちろん成績は良いはずもなく）学校を卒業し、やっとテストとおさらばだと思ったら、抜き打ち実力テストの日々です。甘い考えをした罰でしょう。背負っていきます。紹介の問題については自分の薄っぺらな実力を向上させる事と高次医療機関の充実が解決の糸口でしょうか。

休日診療についてですが、これには苦い思い出があります。当地に赴任してきて、14年経過しました。当初夜間も休日もすべて受けていました。診療所にかかった電話は僕の携帯電話に直接転送されました。それが地域住民のためであり、僕の仕事だと思っていました。夜間や休日の電話のほとんどが緊急性のないものでした。仕事の都合で早朝や夜間、休日に受診するわけです。また軽い症状でもいつでも診て貰えるため安易に時間外に受診するようになりました。数年後には笑顔がなくなり仕事が苦痛に



なりました。

役場の方とも相談し、決断するまでは少し時間がかかりましたが、時間外の電話対応を中止しました。当初は罪悪感がつきまとい、町民が自分の悪口を言うのではと怯えていました（そりゃ、重症だったね）。陸の孤島ではなく他の医療機関に車だと20分で行けますし、本当に救急なら当院に寄る時間は無駄だと、思うようにしました。

結果、町民はやや不便になりました。僕はといえば時間の経過と共に気持ちが徐々に楽になりました。笑顔も戻り仕事もまた楽しくなってきました。しかし心の隅っこでは、僕の代わりにどなたかが僕の仕事をしてくれているわけであり、時間外の患者さんの不安を取り除く仕事も放棄しているわけで、心底落ち着いたという感覚はありませんでした。

仕事に張り合いが出てきたら不思議なもので、時間外の電話もつなぐようになりました。一時期時間外対応をしないことが知れわたったせいか、いわゆるコンビニ受診は減り正当な？時間外受診が多くなり精神的にもそれほどつらくはありません。

その後、北空知医療圏の基幹病院である深川市立病院の医師数の減少が問題となりました。ぼくがサボった分、基幹病院の先生にご迷惑をお掛けしていたはずです。他人事ではない問題でした。深川医師会が中心となり対応策を練り北空知全体で医療を守ろうとの意識の下、新しい休日診療体制を作りました。元来患者さんは大病院志向で、基幹病院への患者集中も問題になっていましたが、逆転の発想で開業の先生達が基幹病院に出向き、日曜休日の日勤診療を行っています。僕も年に8回日曜日に深川市立病院に出向いて診療をしています。それで更にサボりの罪の意識は軽くなっています。

一つ一つの医療機関単位だと責務の多さに潰される場合もあるでしょうが、北空知のように、ひとつの医療圏単位で皆が協力し休日医療を守っていく作戦は成功なのではないでしょうか。未完成の部分は、全員参加を強制できず、一部の医師は問題解決に参加していません（マイナーな診療科は別です）。

予想していなかったいい点もありました。基幹病院の勤務医の先生の負担を軽くするという面もありますので、開業医と勤務医の先生方のコミュニケーションが円滑になりました。紹介の際にも良い効果が出ています。また医師会が主導で実践していますので、医師会活動に自信ができました。会費を納め雑務が回ってくる、損しているか得しているかわからない活動が、実は社会で誰かがやらねばならない大切な仕事であり、僕ら同業者の利益のための互助会の姿そのものだと気付いたからです。